



Vol.24 2010年8月1日
会報・人間工学専門家認定機構編集委員会

➤ 報告

日本人間工学会全国大会における
シンポジウム実施報告

福住伸一 (NEC) /シンポジウムコーディネーター

6/19～20に北海道大学(札幌)で行われた日本人間工学会第51回大会において、「人間工学専門家資格の活用と課題」というタイトルでシンポジウムを行った。本シンポジウムの趣旨は、次のようである。

「人間工学専門家資格認定がスタートして、7年が経過した。この間、173名の専門家が誕生し、さまざまな分野で活躍している。しかし、その活動は地道であり、人間工学領域内においても、専門家としての具体的な成果、世の中や事業への貢献はあまり知られていない。本シンポジウムでは、その具体的な成果を紹介し、専門家の意義を理解していただくことと、大学側の意見や要望なども踏まえて、専門家資格の進むべき方向性を検討する。」

この趣旨を踏まえ、機構長の青木先生からの資格概要説明に加え、2件の事例紹介(富士通デザイン 松本啓太様、労働科学研究所 松田文子様)、国際動向(テクノバ 藤田祐志様/代理発表 堀江良典先生)、大学の取り組み(日大 堀江良典先生)、の発表があった。これらの発表を通じた議論の中心は大きく3つあった。それらは、

- 1) 専門家として、どのように成果を出すのか?
- 2) 依頼する側は専門家を頼るのか? 組織を頼るのか?
- 3) 専門家の認知度を高め、また広めるために何をすべきか?

である。1)については、やはり地道に取り組むことが重要であるが、専門家としての成果であることをアピールする必要がある、2)については、まずは組織を頼るのであるが、その中に専門家がいることを、1)の成果と合わせて主張することが重要である、3)については、教育と現場との連携が重要である、という方向に向かった。

今回、最終日の最終セッションということもあり参加

者は30名程度と少なかったが、今後もこのような議論の場を設け、専門家の存在、具体的貢献を多くの方に知ってもらい、専門家を通じたよりよい社会の実現を目指していくよう、機構として努力していく。

➤ 書籍紹介

正田 亘 (日本人間工学会名誉会員)

『増補新版 人間工学』

正田 亘 著、恒星社厚生閣、1997年

この本は、1981年に刊行された『人間工学』の改訂増補版です。刊行当時、評論家の柳田邦男氏から毎日新聞の書評欄で評価を得ました。著者は当時、立教大学文学部心理学科で「心理学特講(人間工学)」の講義を担当していましたが、人文社会系の文献が少ないことから、執筆を試みました。1章「人間工学とは何か」、2章「人体計測」3章「作業姿勢」4章「手と足と道具」5章「視覚表示」6章「聴覚表示と音声伝達」7章「人と機械の配置」8章「人間工学と安全」9章「環境と人間」10章「人間の行動特性」から構成されています。

この本では、自分自身の行った研究を骨子とする狙いもあって、一般の概論書からみると異端と思われるような部分もあえて加えることとしました。8章、9章、10章等がそれです。

増補新版では第1版で触れ得なかった11章「VDTとVR」:1節 VDT作業、2節 VR(バーチャルリアリティ)、12章「福祉・看護の人間工学」:1節 高齢社会と障害者への配慮、2節 看護・病院の人間工学が加筆されました。筆者の専攻分野が心理学、とくに産業・組織心理学、安全心理学でありますので、上記の本の内容が心理学の内容に偏っている面は否めませんが、人間工学会発足時の状況や ergonomics の言葉が使われるようになった経緯はつかめると思います。

➤ 書籍紹介

恩田和征

(スズキ株式会社 四輪プラットフォーム設計部)

『人間の許容限界事典』

山崎昌廣、坂本和義、関邦博 編、朝倉書店、2005年

本書は人間の許容限界について書かれたものです。書名に「人間の」と書かれているだけあって、人間に関する非常に多くの限界について触れられています。

- 1.生理 2.心理 3.運動 4.生物 5.物理 6.化学 7.栄養と

7つの分野に分かれており、全部で142項目の「人間の許容限界」について書かれています。

視覚を始めとする5感はもちろん、電磁波に対する限界や寿命の限界、飢餓に対する限界などの普段知りえる機会のない限界についても触れられており、読み応えのある内容となっています。事典とはいいつつも、専門家の方が参照するというだけではなく、一般の方が読み物として読んでも面白いと思います。是非ご一読下さい。

➔ 書籍紹介

井上勝雄

(広島国際大学 心理科学部感性デザイン学科)

『魅力的なインタフェースをデザインする』

井上勝雄 著、工業調査会、2008年

『PowerPointによるインタフェースデザイン開発』

井上勝雄 編、工業調査会、2009年

最近、アップル社からiPhoneとそれに続くiPadが登場すると、人々がその魅力的なインタフェースデザインに強く注目し大きな話題になっています。このように製品開発ではインタフェースデザインの重要性は年々高まっています。そこで、企業のデザイン部門ではユーザビリティ評価を早くから導入しています。しかし、筆者の企業体験から、ユーザビリティ評価はあくまでも製品評価の範疇に限られるため、魅力的なインタフェースをデザインするには学問的に確立された設計論が必要です。そのような背景から、筆者が大学の研究者になったことを契機に、この希求されている設計論の布石となることを目指して、拙著「魅力的なインタフェースをデザインする」を出版しました。日本で最初の設計論を目指した本のため、多くの企業の人々の好評を得ている。また大学院の教科書にしている大学もあると聞いています。

設計論のためには図面が必要なように、インタフェースデザイン設計論でも図面に相当する開発ツールが必要で、それがラピッドプロトタイプング手法です。現在では、簡素なペーパーによる低忠実度プロトタイプとフラッシュなどの描画ソフトを用いた高忠実度プロトタイプに2極化しています。そのため、以前からこの中間の中忠実度プロトタイプが企業では強く求められていました。それが身近なパワーポイントを用いた新しい手法です。この手法は短時間で制作できかつ修正も容易、分担作業が可能という大きな利点があります。その内容を出版したのが拙著「PowerPointによるインタフェースデザイン開発」です。ペーパープロトタイプは専門書が刊行され広まったが、パワーポイントに関しては、まだ海外でも断片的な情報しかないためこの本が世界初と言えます。

●認定人間工学専門家の新規登録

新たに人間工学準専門家として認定された方々をご紹介します。(氏名50音順、敬称略)

【認定人間工学準専門家】

(5月1日認定) 小島鉄平

(8月1日認定) 木村一久、高部涼、水野喜信、
山口大次郎

編集後記

この会報は、印刷して読まれることを前提に、デジタルデータ(PDF形式)で配付していますが、最近、電子出版・電子書籍に関するニュースを多く見ます。アップルがiPadの国内発売を開始(5月28日)、日本経済新聞電子版の有料会員数が7万人を超えた(7月7日)、amazonでは電子書籍端末Kindleでの電子書籍販売数が紙の書籍の販売を上回る(7月19日)、電子書籍の標準化などを検討するための電子出版制作・流通協議会を設立(7月27日)、等々。紙の蔵書をスキャンし、そのデジタルデータを、いつでも見られるようにパソコンに入れて持ち運ぶ人も増えているそうです。そのための道具として、綴じられた本をスキャンしやすくする個人向けの裁断機まで売られています。

電子書籍という新しいメディアは、新しいユーザーインターフェースを生み出します。そして、電子書籍の読みやすさや、そのユーザーインターフェースの使いやすさについては、人間工学を活用した、多くの研究や評価が行なわれると思います。

さて、紙か、デジタルデータかはともかく、人間工学に関する書籍について、会員の皆様に紹介記事をお願いしました。今号には、3名の方からの記事を掲載しましたが、今後も継続して紹介していきたいと思いますので、ぜひ、ご推薦書籍について、記事をお寄せ下さい。

(松本啓太)

○会報、編集委員会へのご意見、情報提供は

e-mail : cpenewsletter@ergonomics.jp

〒107-0052 東京都港区赤坂 2-10-16 赤坂スクエアビル4-B

日本人間工学会事務局

会報・人間工学専門家認定機構編集委員会

【編集委員会メンバー】

松本啓太(編集委員長)、青木和夫、城戸恵美子、斉藤進、
藤田祐志、吉武良治